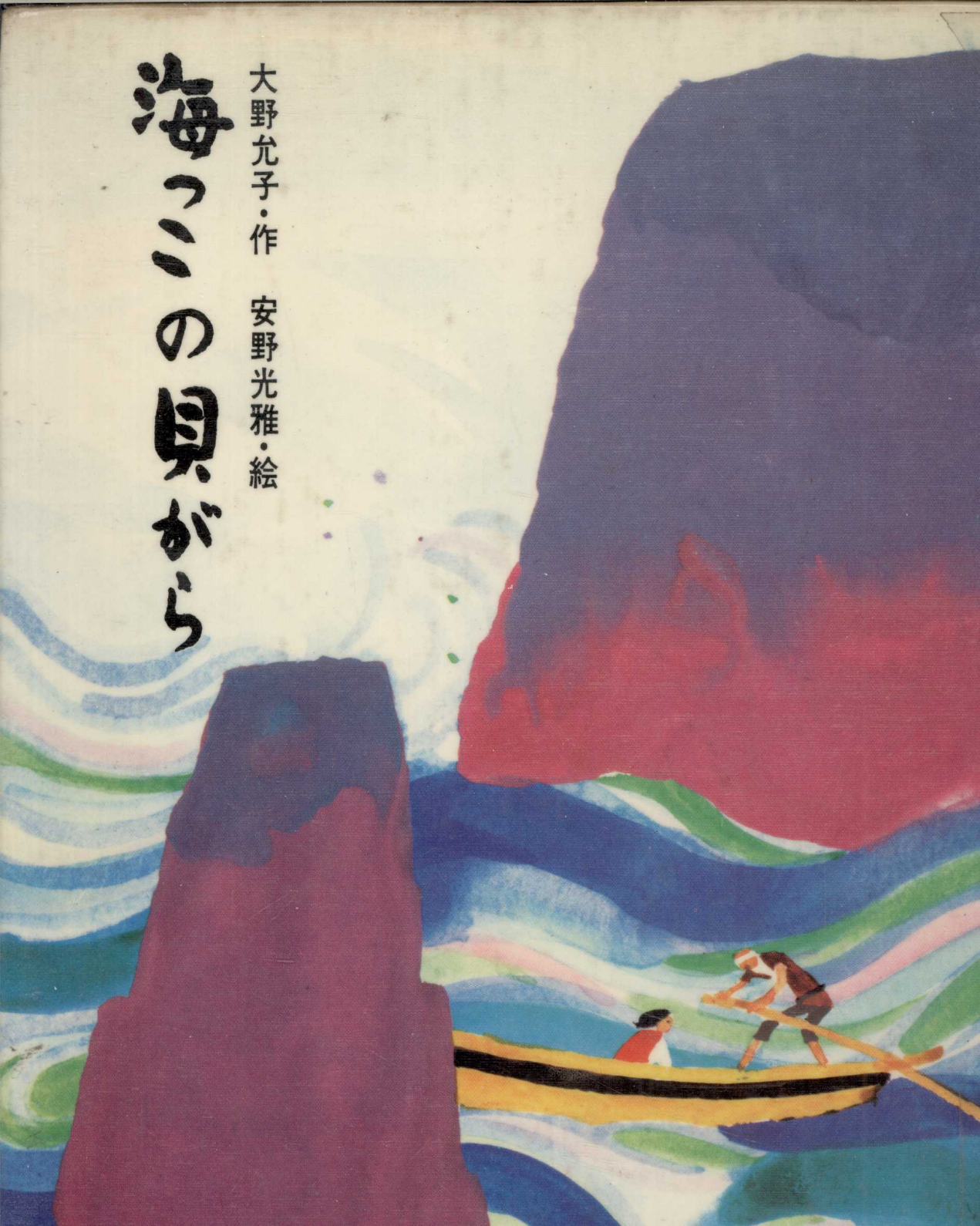
海っこの貝がら

大野允子・作　安野光雅・絵



海ここの貝がら

大野允子・作　安野光雅・絵

ポプラ社の創作文庫　14
海っこの貝がら
大野允子
ポプラ社　昭和49年　122p　22cm
N.D.C　913

日本財団支援
笹川良一記念文庫
財団法人日本科学協会

海っこの貝がら　検印省略

著者　大野允子　昭和49年12月　発行©

発行者　久保田忠夫

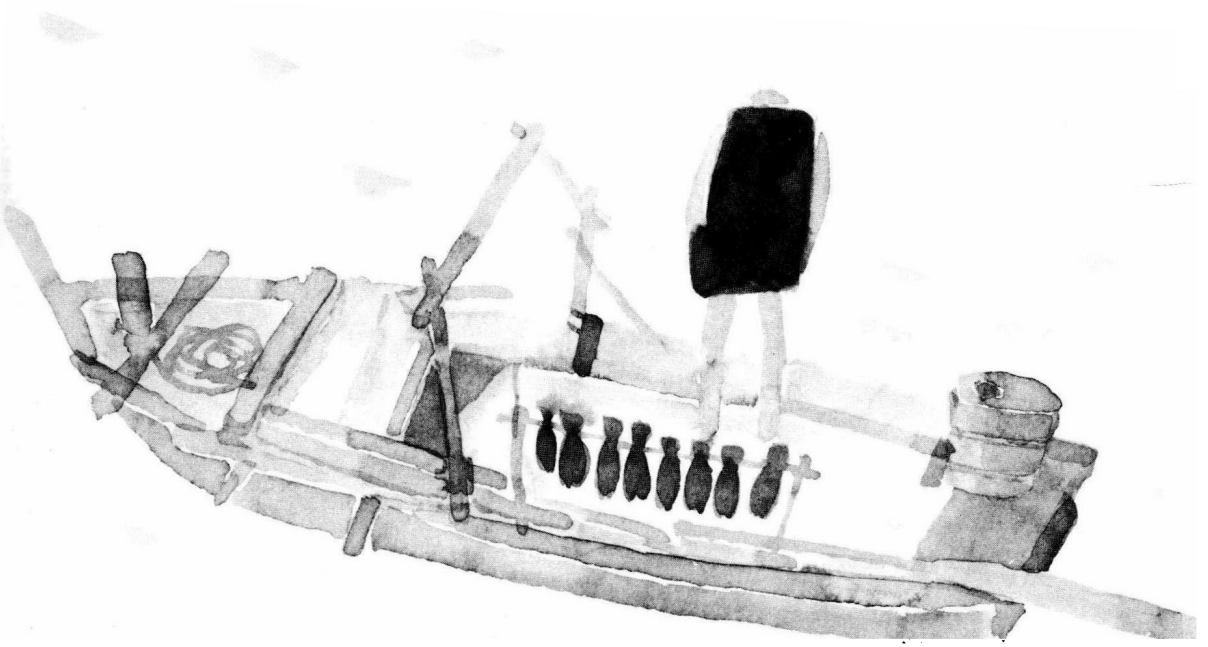
発行所　株式会社　ポプラ社　〒160　東京都新宿区須賀町5
振替　東京　149271

印刷所　新興印刷製本株式会社
製本所　富士製本株式会社

落丁・乱丁本はいつでもおとりかえします

8093—005014—7764

目をつむってごらん
なにが見える？
へんなの
目をあけたら見えるんだろ？
そうかな
ほんとにそうかなあ？
わたしが目をつむると
いつも海が見える
島が見えてくる
そして
海と島のお話がうまれる



もくじ

海っこの貝がら■5
しま子とじいの海■25
黒いチョウ■51
たいこの鳴(な)るほうへ■85
あとがき■121

著者の紹介

大野允子（おおの　みつこ）
一九三一年広島県に生まれる。広島大学文学部卒業。一九六三年広島の仲間たちと短編童話集「つるのとぶ日」を出版、児童福祉文化賞を受賞。他に「海に立つにじ」「ヒロシマの少女」「見えないトゲ」「夕焼けの記憶」などの作品がある。

安野光雅（あんの　みつまさ）
一九二六年島根県に生まれる。著書に「ふしぎなえ」「さかさま」「ふしぎなサーカス」「ＡＢＣの本」などの絵本の他、「昔咄きりがみ桃太郎」「楽しい数学〝集合〟」「石頭計算機」など異色作が多数ある。

海っこの貝がら

おばあは、海っこの話を、ようしたもんだ。

「クショ　クシュ　クッシャーン

ア　サミ

タキビ　アタラシテクレヤ

わしの顔を見るなり、海っこはいいおったわい。」

「クチョ　クチュ　クッチャ――ン。」

さゆりはおばあのまねをする。

「おばあ、海っこに、たき火してやったか？」

「ああ、してやったぞい。」

海っこの話をするとき、おばあのしわしわの顔に、暖かいものがひろがる。

「――あれは、八月の十五夜のばんじゃった。」

海っこが、海からあがってくるのは、月のまんまるな十五夜のばんに、

きまっとる。

ワカメのふんどしをして、なわの切れたタコつぼをだいとるから、見ればすぐにわかる。それだけじゃない、寒がりの海っこは、いつでもくしゃみをしとる、十五夜のばんに、背なかのほうで、ふいにくしゃみがきこえたら、たいていは海っこだ。

おばあは、海っこのくしゃみが、うまかった。くしゃみがおもしろうて、さゆりは、海っこの話をおばあにねだったもんだ。

「クチョ　クチュ　クッチャ――ン

ヤ　サミ」

さゆりがまねをすると、いつでもこうだ。

「おばあ、たき火してやったか？」

「ああ。ムギわらのたばをもってきて、ぱしぱしと火をたいたぞい。はよう、こっちへきて、あたりんさいや、いうとな、ぎょうぎのええこっちゃ、まっ白い歯、ちょろっとだして、海っこは、

ゴチソサマデ　ゴザリマス

と、いいよったわい。」

「ゴザリ　マス、いうのんか？」

「ああ、かいらしい男の子じゃった。」

おばあのこたえがわかっとるのに、さゆりはいつでも、おんなじことをきいたもんだ。

「ほんまは、海っこ、わりい子じゃろ？　のお、おばあ。」

「ああ、悪い子じゃ。昔っから、親のいうことをきかずに、海へいって、死んだ子の魂が、海っこになるんじゃと、いわれとる。」

「タマシイいうもんは、見えんのじゃな、おばあ？」

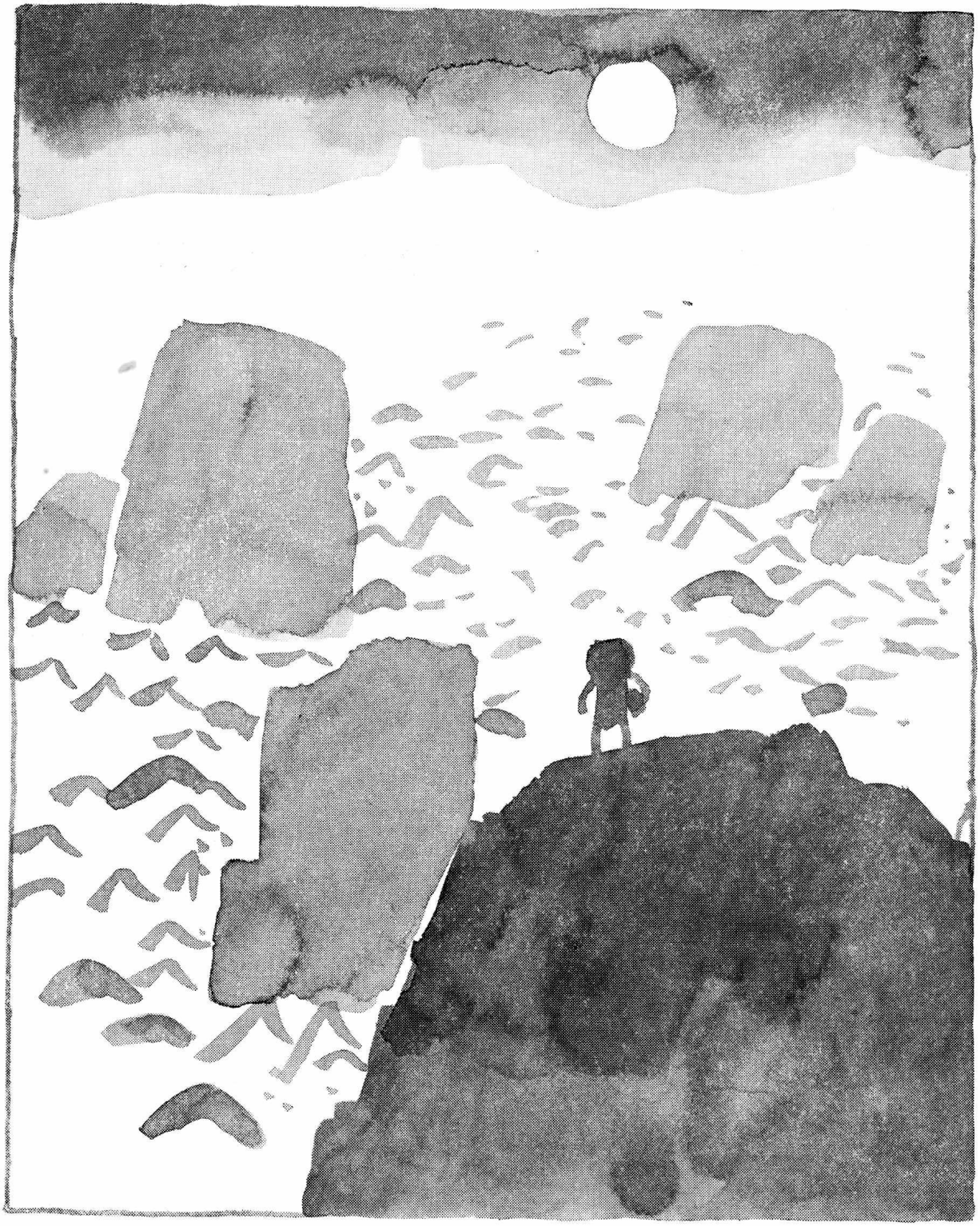
「海っこのことを、信じとるもんにしか、海っこの姿は見えんのじゃわい。」

「……さゆり、海っこ、見たいな。」

おばあはしずかに首をふって、さゆりの頭をなでたもんだ。

「海っこが会いにくるのは、うそをついたことがない人間だけなんじゃ。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

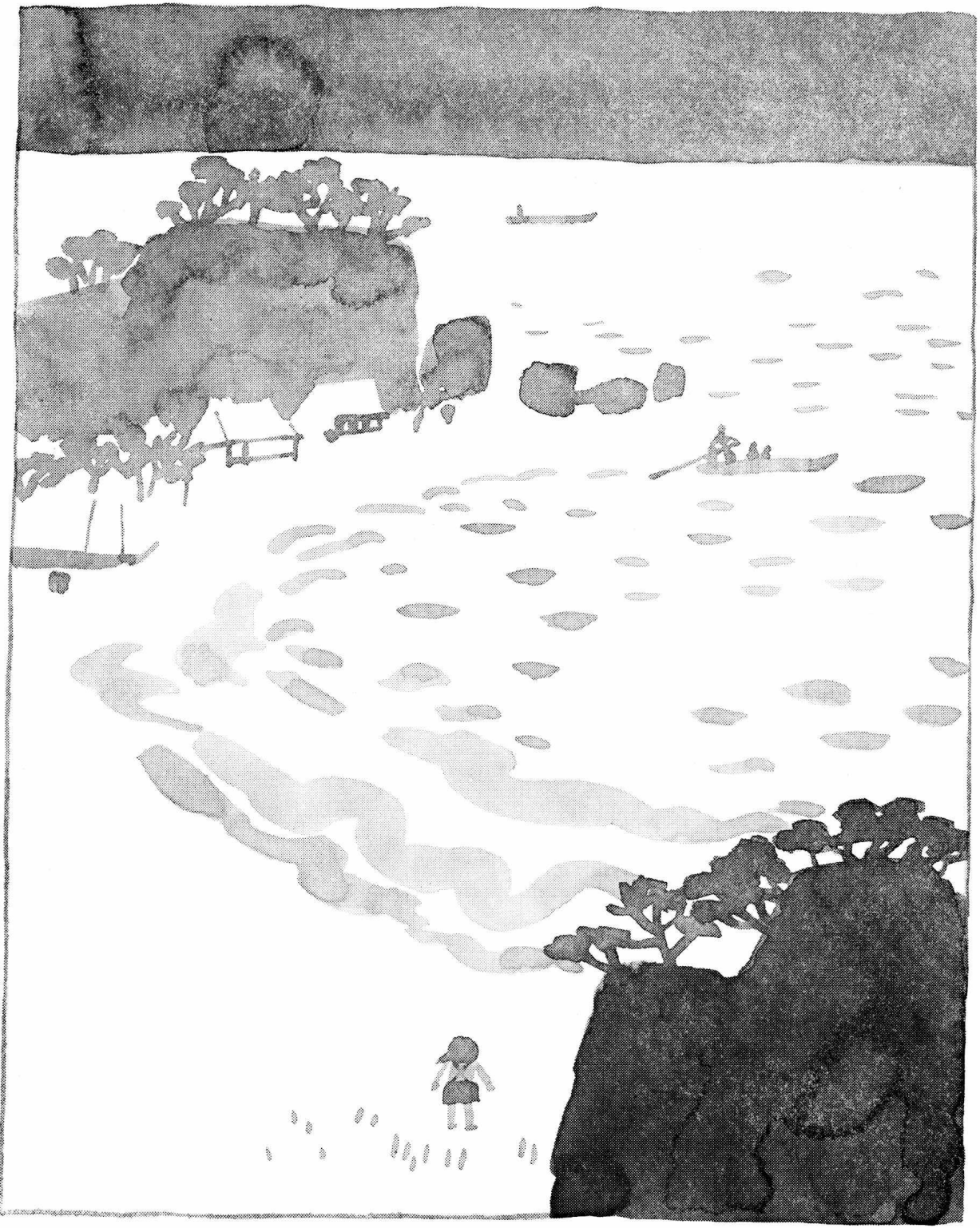


島の入り江のまんなかに、ロウソク岩がある。
とがった岩のまわりで、いつも、波があわだっているから、とけたロウが、海のうえにういているように見える。
海っこは、ロウソク岩のしたにすんどるんじゃ、とおばあはいうとった。
とんがり岩のうえで、タコつぼのなかの貝がらをかぞえとったと、いうとった。
三日月のばんに、海っこが、貝がらかぞえとるのを見たと、おばあはいうとった。
「海っこ、こんまい声で、いうんよ。
ドウゾ　カイガラ　モットイテ　クダサイ
ウミッコニ　オウタ　シルシ
イツマデモ　ダイジニ　トットイテ　クダサイ」
おばあにきいた海っこの話なら、さゆりはみんなおぼえとる。

「おばあは、のんきべえじゃ。」
海っこの貝がらを、おばあはどこかへおとしたのだ。
「どこへ、貝がら、おとしたんじゃろ……おばあは、どこへ、いったんじゃあ……」
海っこがすきだったおばあは、この春、死んでしまったんだ。
さゆりは、ロウソク岩にむかって、石をなげる。音もたてずに、海は、さゆりのなげた石をのみこんでしまう。
「……海っこに、会いたいな。」

父ちゃんはいう。
「あれは、おばあの昔話だ。」
母ちゃんはいう。
「親のいうことをきかん子は、ろくなめにあわんということじゃね。」
父ちゃんも母ちゃんも、海っこのことなんか信じてはいないんだ。

だから、さゆりはひとりで、海っこのまねをする。
「クチョ　クチュ　クッチャ――ン
ヤ　サミ」
夏のはじめ、入り江のまんなかのロウソク岩が、きえた。ハッパをかけられて、粉ごなにくだけてしまったんだ。
「海っこ、どうしたろ？」
やがて、岬のむこうへ、海水浴場ができた。
きょうも、お客をのせた船が、ロウソク岩のきえた海を走ってくる。
島がにぎやかになって、父ちゃんも母ちゃんもいそがしい。
父ちゃんは、つりのお客を舟へのせて、沖へでる。
母ちゃんは、海の家の食堂へつとめとる。
「ササゲつむの、わすれんさんなや。」
しごとだけちゃあんといいつけて、母ちゃんはでていった。
夏休みがきても、さゆりはおもしろうない。



「……おばあがおったら、ええのにな。」

さゆりはひとりで山へのぼる。

だんだん畑のササゲは、ようういれとる。

おばあが植えたササゲだ。

さやがはじけて、ササゲの黒いつぶが、土のうえにもこぼれとる。

一つぶ、一つぶ、ひろうて、かごへいれる。

おばあが、さいごに植えたササゲなんだ。

父ちゃんも母ちゃんもいそがしいから、山の畑をつくるのはやめだと、はなしとった。

おばあは、ササゲのにたのがすきじゃった。

塩あじだけのしょっぱいにまめが、だいすきじゃった。

「おばあ。さゆりが、ササゲ、にてやるよ。」

あせが目にしみる。しかしか目にしみる。

りょう手で目をこすりながら、目のおくが、なんや、まぶしいなあと思う。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com